

Os Lusíadas 3

ルジアダシュ（訳第2回）

小林英夫・池上岑夫・松尾多希子

31

かれは運命の神々からきいていた、
イスパニアから屈強な男たちが
はるばる大洋をこえて渡ってき、
ドリスのあらゆる全インドを従えるだろう、
そして新しい勝利をもって
わが古来の名声をもひとのをも消し去るだ
ろうと。

いまだにニュサが遺影をまもる
栄光をなくすのは大きな苦痛であった。

32

とうにかれはインダスを平げており
いまだかつて運命神も偶然もかれが
バルナソスの水をのむものらによって
インドの覇者と歌われるのを禁じはしなか
ったのに、
いまや怖れるのだ、かほどの名声が
くらい忘却の水がめに収められてしまうの
を、
船路にある勇猛なポルトガル人が
そこに到り着いたあかつきには。

33

美しいヴェヌスはこれに異を唱えた、
ルシタニア人に好意をよせる女神が。
いとしい古代ローマの民のひととなりか
かれらにさながらに見られるというので。
すなわちティンギスの地で示した
けなげな心と、大きな運勢とに、
それから国語に、これは考えてみれば
わずかに訛ったラテン語そのものなのだ。

34

これらの理由がキュテラの女神を動かした、
そのうえ、バルカからからはっきり聞き及ん
でいる、

戦い好きの民がひろがる場所では
明眸の女神があがめられると。
このように、ひとり恥をこうむるのを怖
れ、

いまひよりは名誉をえたいと望みつつ、
自説を固執してやまなかった。
味方するものは双方にあった。

35

あたかも狂暴な南風や北風が
野生の樹々のおいしげの林に
来襲してめくらめっぽう
おぐらい森のきだ小枝を折れば
一山あげて叫びたち、木の葉は飛びちり、
山なみは煮えくりかえる、そのように
聖きオリュポスの神々のあいだに
さわぎが持ちあがったのであった。

36

しかしよろずの神をさしおいて、うまずや
まず
女神の肩をもってきたマルスは、
ひとつにはむかしの愛のえにしにより、
ひとつには強き民の勇にめでて、
神々の間からすっと立ちあがった。
おもてには憂色がうかがわれた。
首からさげた頑丈な楯を
うしろにかなぐり、形相すまじく、

37
金剛のかぶとの^{まひし}眉庇
すこしく持ちあげ、自信満々、
武具にしっかり身をかためた
ユピテルのみまえに意見言上とまかり出た。
そして槍の台尻をもってあらあらしく
王座にひと突きつきあてるや、
大空はふるえ、アポロは驚きのあまり
血の気がひいたか光をすこしく失った。

38
述べたことばは — 「^{おおつみ}お父上よ、大威光
には
お造りなされた生きとし生けるものが従い
ます。
もしその武勇と偉業をあなたのためられ、
他の半球をさがし求めるこの民が、
あなたのつとに定められたとおり、
屈辱をこうむるのを欲せられないなら、
廉直な判官であられるあなたよ、札付きも
のの
言い草なんぞに耳を傾けたもうな。

39
と申すのも、ここであまりの恐怖に
理性が負かされたのでないならば、
バックスこそかれらを擁護すべきでした。
外でもない、かれらはその^{おんこ}愛子ルーンの後
えいだからです。
でもかれの申し分は不問に付しましょう。
なぜならそれはけっきょく邪念に由来する
からです。
羨望などというものは、いつかな、他人に
ふさわしく
天も欲する財宝を篡奪しはしないでしょう。

40
そしてあなた、権能大なる父上よ、
いったんあなたの取られた決意は
ひるがえしなさいますな、なぜなら
手をつけて中止するとは卑怯だからです。

メルクリウスは、その身軽さにおいて、
軽い風にも鋭い矢にもまさりますから、
インドの情報が得られ、船人の休養できる
陸地を教えにゆかせて下さい。」

41
こういいおわるや、いかめしい父は
かぶりを下げて、勇壮なマルスの
申し述べたことに同意を与え、
居ならぶ面々に神酒をそそいだ。
やがて神々はひとりびとり
天の川をつたって散っていった、
うやうやしく敬意を表しながら、
おのがじし定めのおりへと。

42
以上のことが全能のオリュンポスの
うつくしい天空の宮居でおきていたとき、
戦い好きの民は切り進んでいた、
すでに南と東の海域を、
エチオピア海岸となだかいサン・ロレンソ
島の
あいだを。折しも燃える太陽は
焼きつけていた、かのテュフェウスが
おどして魚に変えてしまった神々を。

43
風はおだやかにかれらを運んでいった、
あたかも天が友とみなしたかのよう。
大気も天候も見るからにさわやかであった。
一片の雲もなく危険のうれいもなかった。
すでにブラソ岬を過ぎていた。
エチオピアの海岸の古き地名だ。
時しも海は、とりまき洗う新しい島を
つぎつぎとかれらに示しつつあった。

44
したたかの提督、ヴァスコ・ダ・ガマ、
一大事業を買ってでた男、
豪毅果敢な心の持ち主、
つねに福運に見舞われてきた。

眼前の^お陸が無人の地と見えようと
この期に及んで尻込みのいわれはない。
いざ前進とほぞを固めた。
だが事は志どおりには運ばなかった。

45

やがて、こはいかに、群れをなして
小舟が陸にちかいあの島から

近づいてくるのが望まれた、
帆を張って沖の波を切りながら。
人々は悦びに活気づいた。
ただもう悦びの^{もと}因を眺めるだけであった。
—「あの連中はだれだ？」(と言い合っ
た)

「どんな風俗、どんな掟、どんな王様か？」

訳 注

12.8 アエネアス—Eneias(Aeneas)。cf. 3.1注。トロヤの勇士。AnquisesとVenusの子。トロヤのPriamusの娘Creusaをめとる。トロヤ破壊ののち、息子Asaniusを含め一族をひきいて逃亡の途次、妻を見失い、もどろうとすると亡霊が現われ、じき消えてしまった。そこでThraciaにむかい、Epirosにいたり、さらにCarthagoに漂着したところ、その女王Deidoの歓待をうけ、長居をすることになるが、ついに振り切ってSiciliaにわたり、さらにそこからイタリアにわたり、Latiumの宮廷に迎えられ、王女Laviniaと結婚する。そして都市Laviniumを建設するが、これがローマ人発祥の地となる。Vergiliusは、ローマ市建国の祖をRemusとRomulusとする伝説にあきたらぬ当時のAugustus帝の命をうけ、Aeneasを主人公とする叙事詩をつくり、世界の支配者たるローマ国民にふさわしい神譜の起原を供したのである。

13.1 フランス王シャルル—Carlos, rei de França。シャルル大帝(Charlemagne, lat. Carlus Magnus)の名で知られる(742-814。在位768-814)。フランク王国カロリング朝の開祖。Pépin le Brefの長子。父王の死後、弟のCarlomanと王国を共同統治したが、弟が771年に死んでからは全フランク王国の唯一の君主となった。その長い治世における事績を武功と文功に分けてみるならば、まず前者としては、Langobardo王国(774)、Aquitania王国、Bayern(788)等を征服してフランク王国に併合し、もっとも頑強な抵抗をみせたザクセン族は、その首長Widukindの降服によってついにこれを併合し(799)、PannoniaのAvar族も同様に制圧した。王はキリスト教の守護者をもってみずから任じ、武力征服と共に改宗を強制したが、スペイン侵入だけは失敗におわった。すなわち778年にSaragossaに迫ったが、サラセン軍の奇襲をうけて前線部隊が全滅の憂き目にあってしまった。800年王は教皇庁内の紛争解決のため、教皇Leo IIIの求めに応じてローマに出征し、同年のクリスマスの日に西ローマの帝冠をうけた。これは812年になってピザチン皇帝から承認された。大帝はAix-la-Chapelle(ドイツ名Aachen)を帝都と定めて学者を集め、学校をひらき、大いに学問を奨励したので、カロリング朝ルネッサンスが開化するに至った。

13.1 カエサル—César. Gaius Iulius Caesar。ローマ最大の武人、政治家(B.C. 102?—B.C. 44)で、西洋史上最も大きな影響をのこした人物の1人。前58-56年、ガリア人、ゲルマン人を平定し、さらに前55年には最初のローマ人としてライン川を渡り、また前55、54年の2度、ブリタニアに遠征した。前49年末かれのガリアにおける10年の任期の終了する時、カエサルを任期前に召還してその施政を告発すべく元老院会議で決議されるや、首都に進撃し、敵対者ポンペイウスを追ってエジプトに入っ

た。エジプトでクレオパトラを王位につけた後ローマに帰ると、前46年元老院派の軍隊をタブソスに破り、長く共和政の権力を握っていた元老院支配をここに打ち倒した。タブソスの戦いののち共和制の伝統に反して10年任期のディクタトルになると、その施政は多岐にわたり、とくに立法活動を盛んに行った。カエサルは雄弁において当代一流であったほか文章もよくし、ガリアでの行動、ポンペイウスとの戦闘について、「ガリア戦記」「内乱記」の二著をあらわしている。

13.3 アフォンソー一世 — o primeiro Afonso. D. Afonso I (1111 - 1185, 在位1143 - 1185)。ポルトガル王国とアフォンソ王朝の創始者。ブルゴーニュのエンリケ伯とレオンのアフォンソVIの娘テレザとの子。夫エンリケ伯が没すると、ガリシア貴族フェルナンド・ペレシュ、トラバ伯と結婚した母テレザが、領土権を主張したため、息子アフォンソ・エンリケシュは母親と継父と戦いを交え、領土を守り、相次ぐレオンとの戦闘を経て、1143年サモラ条約(Tratado de Samora)をもって独立国の王としての地位をレオンに認めさせた。かれの生涯は、最初はレオン人と、後にはモロ人との戦いの連続で、あらゆる戦争に一兵士として臨み、ポルトガル領土拡大に力をつくした。

13.6 国家を磐石の重きにすえた勇士 — 第10代ポルトガル王であるアヴィシュ王朝(Dinastia de Avis)の開祖ドン・ジョアンI(D. João I, 1356 - 1433, 在位1385 - 1433)を指す。第8代王D. Pedro Iとガリシアの貴族Da Teresa Lourençoとの子で、7才の時アヴィシュ騎士団(Ordem Militar de Avis)のmestreにまつりあげられた。D. Pedro Iの子第9代王ドン・フェルナンド(D. Fernando, 1345 - 83)が没したとき、その妻ドナ・レオノール・テレス(D. Leonor Teles)は、カスティリャ王ドン・フアンに嫁した娘ドナ・ベアトリシュ(D. Beatriz)に王位を継承させることを拒み、愛人Adeiro伯João Fernandesと共に王権を握り続けんとした。既にAvis騎士団長として宮廷の信頼を得ていたドン・ジョアンは、ヌノ・アルヴァレシュ・ペレイラ等憂国の士と語ってアンデイロを倒し(1383)王権を奪取した。ポルトガル国内の大部分の貴族は、姑の要請に応じて侵入したカスティリャ軍の側についたが、司令官ペレイラの軍略が功を奏し、1385年Aljubarrotaの役でカスティリャの大軍を撃滅して、ポルトガルの独立を守った。ドン・ジョアンIは、正統の王位継承者でなく、国民議会(Cortes)によって選挙された王であったため、また、Aljubarrota役で大半の貴族が敵方として破滅したので、非常に民主的な政治を行ったことで有名である。かれが英国のランカスター公爵(Duque de Lancastre)の娘ドナ・フィリッパ(D. Filipa)を妻としたことによって、ポルトガル王室は以後英国王室との間に政治的・経済的に密接な関係を持つようになる。なお、モロの拠点Ceutaを攻略して(1415)、アフリカにポルトガル領を獲得したことも記憶されねばならない。

13.7 いまひとりのジョアン — 第13代ポルトガル王ドン・ジョアンII(D. João II, 1455 - 1495, 在位1481 - 1495)を指す。1481年父王ドン・アフォンソV(D. Afonso V)が没し王位につくや、王権伸張の意図を明らかにし、コルテスの上訴を受け入れて王室財産を横領している貴族を厳しく取り締まり、また貴族の権力濫用を戒めた。このようにして貴族の力を弱め、絶対王制の基礎を固める一方、エンリケ航海親王(Infante D. Henrique, Navegador)の事業を引き継ぎ、サン・ジョルジュの要塞建設、ディオゴ・デ・カン(Diogo de Cão)によるザイレ河の発見とアンゴラ海岸の発見(1486)が行われ、地理上の発見はさらに進められた。1487年バルトロメウ・

ディアシュ(Bartolomeu Dias)がアフリカ最南端をまわり、ドン・ジョアンIIは、これを喜望峰(Cabo da Boa Esperança)と命名した。

13.8 アフォンソ三世 — o terceiro(Afonso)。第5代ポルトガル王ドン・アフォンソIII(D. Afonso III, 1210—1279, 在位1248—1279)。第4代王の兄ドン・サンショII(D. Sancho II)が教会と不和に陥った時、間に入って調停に努め、法王によってかれが破門されると、施政を委された。ドン・サンショIIの没後王位につき、1249年アルガルヴェ(Algarve)からモロ人を駆逐し、ポルトガルの国土回復運動を完成した。

13.8 アフォンソ四世 — o quarto(Afonso)。第7代ポルトガル王ドン・アフォンソIV(D. Afonso IV, 1290—1357, 在位1325—1357)。ドン・ディニシュ(D. Diniz)とイザベル(Isabel)の子。親王であったころ、父ディニシュが異母弟アフォンソ・サンシェシュ(Afonso Sanchez)を偏愛したのを嫉妬し、2度にわたり父王とその軍隊にたいし武器を取って反乱を試みた。妻ドナ・ベアトリシュ(D. Beatriz)との間に7人の子をなしたが、その中の1人、カスティリヤ王アフォンソXI(Afonso XI)に嫁した娘ドナ・マリア(D. Maria)が夫に冷たくあしらわれたことを憤ってカスティリヤと戦闘状態に入った。しかし、モロ軍隊がカスティリヤの地に侵入するや、ドナ・マリアの懇請をいれ、アフォンソXIと和解、連合してモロ人をサラド河畔で撃った。アフォンソIVの名を歴史上とくに著名にしたのは、イネシュ・デ・カシュトロの死にまつわるエピソードである。息子ドン・ペドロ(D. Pedro, 後のPedro I)は、かれと結婚するべくポルトガル王宮に來たカスティリヤのドナ・コンシュタンサ(D. Constança)の侍女イネシュ・デ・カシュトロ(Inês de Castro)に恋し、妻コンシュタンサをなおざりにした。妻の死により2人の愛はいっそう強まり4人の子をなしたが、イネシュがイスパニアの有力貴族の出身であるところから、ポルトガル王室にその勢力の伸びることを恐れたアフォンソIVは、3人の部下をして息子の愛人イネシュを暗殺させた。

13.8 アフォンソ五世 — (o) quinto Afonso。第12代王アフォンソV(D. Afonso V, 1432—1481, 在位1438—1481)。幾度もアフリカに遠征し、Alcácer Ceguer, Arzila及び渴望的であったTângerを征服したが、この幸運に乗じて、カスティリヤ王室をポルトガルに併合しようとの野望を抱き、カスティリヤに侵入、Toroにおいてカスティリヤ軍と会戦して敗れた。

14.2 しのめの国々 — os Reinos da Aurora。アジアの国々。

14.5 パシェーコ — Pacheco。「ルシタニアのアキレス」と称されたXVII世紀ポルトガルの著名な司令官ドウアルテ・パシェーコ・ペレイラ(Duarte Pacheco Pereira, XV—XVII世紀)。1503年アルブケルケと共にCochimに到着、Calecutのサモリンとの戦闘で目覚ましいはたらきをした。かれの武勇を見込んだCochimの土民の王子の願いによって、アルブケルケは帰国の際、パシェーコをCochimに残した。Calecutのサモリンは、このあたりのポルトガル軍事力が減少したのを機に、インドから外国人を一扫せんとしてCochimに軍を進めた。パシェーコは、Cochim王子の忠告にもかかわらず、数万の敵軍にたいしわずか100人足らずの軍隊でよくCochimを守り通し、帰国後その名をヨーロッパに知られた。このはたらきにたいする報賞として、マヌエルIによってサン・ジョルジュ・デ・ミナの要塞を委せられたが、陰謀のため不遇な晩年を送った。軍人であると同時に偉大な天文・地理学者で、4冊より成り16枚の地図を含むPrinci-

pio do Esmeraldoをのこした。

14.5 テーショ河 — o Tejo。スペイン語でTajo, 英語でTagus。スペインに源を発し、大西洋に注ぐポルトガル最長の河。スペインのToledo, Alanxuês, ポルトガルではAbrantes, Constança, Santarémを流れ、リスボンで大河口をなす。全長1120 km, うちポルトガル領内230 km。大発見時代の船舶はすべてテーショ河の岸辺Resteloの海岸(現在リスボン郊外ベレン海岸)から出発し、現在ここには、ベレンの塔(Torre de Belém), ジェロニモシュ寺院(Mosteiro dos Jerónimos)がある。

14.6 アルメイダ父子 — os Almeidas。初代インド副王フランシスコ・デ・アルメイダ(Francisco de Almeida, 1450? - 1510)と息子ロレンソ・デ・アルメイダ(Lourenço de Almeida, ? - 1508)を指す。ヴァスコ・ダ・ガマによってインド航路が開かれると、インドにおけるポルトガルの勢力を確保し、ヨーロッパ～インドの航通路を守るために、インドに副王としてフランシスコ・デ・アルメイダが派遣された(1505)。途中アフリカ東海岸の要所を征服しながらCananorに到着、さらにCochimに赴き、Cochim王と同盟を結んだ。ポルトガル人の進出によってインド西海岸の交易から追われたモロ人をロレンソは、Ceilão, Maldivasに攻めた。1508年Cochimからの貨物船を援けるためにChaulの海岸にあったロレンソはトルコ軍に襲われ戦死した。父フランシスコは息子の死をいたく悲しみ、息子の復讐を果すために、かれに代るべくインドに来たアフォンソ・デ・アルブケルケに総督の地位を譲ることを拒み、1509年Diuにおいてトルコ軍を破った。

14.7 アルブケルケ — Albuquerque。アフォンソ・デ・アルブケルケ(Afonso de Albuquerque, 1453 - 1515)。XVI世紀ポルトガル最大のインド統治者。Calecutで異教徒との戦いで勝利を得て後、初代副王アルメイダと植民政策について意見の相違があり、かれと不和になったが、1509年インド総督となるや、海軍力を活用し、1510年Goaを陥落させ、1511年Malacaを攻略し、Moluca諸島を発見するなど数多くのはたらきによって領土を拡大し、かれの時代、東洋におけるポルトガル帝国はその絶頂を迎えた。かれの計画は、Meccaを攻略し、東洋からトルコの勢力を取り除くことであったが、これを果たしえず、Goaで死んだ。

14.7 カシュトロ — Castro。ドン・ジョアン・デ・カシュトロ(D. João de Castro, 1500 - 1548)。第4代インド副王。大発見時代の科学的海洋研究の第一人者であり、偉大な航海者。Diu, Goa, Suez, 北アフリカに指揮官として遠征した後、1545年インド総督としてGoaに到着。トルコ人に包囲されたDiuの解放を行い、Cambaiの土民と戦った。人格すぐれ、よく中庸を守り、かれのインド統治は正義と誠実にあふれていることで有名。かれの研究のうちとくに注目しているのは、航海天文学と海洋学であり、「GoaからDiuまでのインド海岸第一航海誌」「紅海航海誌」「リスボンからGoaへの航海誌」など興味ある記述に満ちた航海誌をのこした。

16.5 テテュス — Tetis (Tethys)。ネレウスとドリリスとの娘。水の神オケアヌスの妻となり、世界中の河川の神々と三千人の娘(オケアニデス)を生んだ海の女神。

16.8 娘むこにと…… — comprar - vos para genro。テテュスの娘と陛下(D. Sebastião)との結婚とは、ポルトガル海洋帝国の永続性を象徴している。この表現は、Vergilius, Georgica I, 31からの借用。

17.1 ふたりの祖父 — os deus avós. ひとりにはドン・セバ스티アンの父方の祖父第15代ポルトガル王ドン・ジョアンⅢ (D. João Ⅲ, 1502—1557, 在位1521—1557)を、もうひとりにはドン・セバ스티アンの母方の祖父スペイン王、後の神聖ローマ皇帝カールⅤ (Carlos V, 1500—1558, 在位スペイン王1516—1556, 神聖ローマ皇帝1519—1556)を指す。ドン・ジョアンⅢ — ユダヤ人迫害の一般的傾向に従って1536年ポルトガルに異端審問制度を確立し、イエズス会を導入した。かれの治世にイエズス会の果たした役割はおおきく、東洋ではフランシスコ・ザビエルが信仰と西洋文明の普及に功績をのこし、ブラジルにも土民の教会のため多くの会士が活躍した。ドン・ジョアンⅢは、1537年大学の改革を行い、リスボンとコインブラの間に度々移転された大学を最終的にコインブラに落着かせ、外国からすぐれた教授をまねいた。ブラジルの開発のためにカピタニア制度をはじめたのもかれであった。経費のかかる北アフリカの基地Serafim, Alcácer, Arzilaを手離し、アジアとブラジルの領土の維持に努めたが、東洋交易はオランダの進出のために振わず、国内の産業は荒廃し、ポルトガル帝国は凋落の色を見せていた。カールⅤ — 娘ドナ・ジョアナ (D. Joana) がポルトガル王子ドン・ジョアン (ドン・セバ스티アンの出生の数週間前に死亡) に嫁したので、ドン・セバ스티アンの祖父にあたる。ハプスブルグ家出身。1506年ブルグンドとネーデルランドを継承、1516年スペイン王位を継承、また祖父皇帝マクシミリアンⅠの関係から1519年対立候補フランスのフランソワⅠを選挙に破って、神聖ローマ帝国皇帝に選ばれた。時あたかもルターの宗教改革運動がおこった直後であり、かれは中世的カトリック的の皇帝権の復活を夢想し、その立場からプロテスタンティズム運動に対立した。フランスは、イタリアの支配とハプスブルグ家勢力の打倒をねらって、カールⅤと敵対、4回にわたる戦いの後カールの膝下に屈した。一進一退のプロテスタンティズム弾圧政策とそれに伴う戦争の後、1555年ついにアウグスブルグ宗教和議を締結、プロテスタンティズムを公認するのやむなきにいたった。カトリックの世界統治の理想が崩壊し、失意に陥ったかれは、1556年帝位を弟フェルディナンドに、スペイン王位を子フィリペⅡ (ポルトガル併合後ポルトガルではフェリペⅠ) に譲り、スペインのサン・ユステ修道院に隠退、まもなく死んだ。

17.2 オリュンポスの宮居 — a • límpica morada. マケドニアとテッサリアの国境地帯にそびえ立つギリシャ最高の峰(2918m)で、この山頂に神々は住んでいると考えられていた。

18.6 アルゴナウタ — Argonauta. 「アルゴの乗組員」の意で、ギリシャ神話の、イアソンと共に人類が最初に造ったといわれる大船アルゴーに乗って金羊毛を求めにコルキスに赴いた英雄たち。転じて大胆不敵な船乗りたちを意味する。

19.7 神聖な海水 — As marítimas águas sagradas. 海や泉や河や湖には宗教的意義が付けられていたので、古代文学では、「聖なる」の修飾語をこれらにつけるのが慣わしであった。ここではその習慣ののりつもの。

19.8 プロテウスの海獣 — o gado de Próteo (Proteus). プロテウスは海の神ポセイドンの従者で、海の畜群、すなわちあざらし(海豹)の番をしていた。プロテウスの海獣とはしたがってあざらしのこと。

20.7 はたたがみの命をかしこみ — Convocados, da parte de Tonante. ユピテルは神と人間との神であり、天空神として、さらに雷霆の神、雨・嵐など気象の神として古くから崇拝されていた。ギリシャ神話のゼウス(Zeus)と同体とされる。

20.8 アトラス翁の孫 — o neto gentil do velho Atlante (Atlas)。アトラスの娘マイアとユピテルの子メルクリウスを指す。メルクリウスは富と幸運の神であり、商売、盗み、賭博、競技の保護者であり、智者として堅琴や笛のほかアルファベット、数、天文、音楽、度量衡の発明者とされている。ユピテルは自分の子の才を愛し、かれを自分自身ならびに地下の神々の使者に任じた。

21.1 七天 — os sete Céus。プロメウスの地理学によれば、宇宙の中央に地球が位置し、その周囲を月、水星、金星、太陽、火星、木星、土星の順で七つの星が廻り、したがって七つの空があり、それらの空をおのおのの神が支配しているものとされた。

22.1 ウルカーヌス — Vulcano (Vulcanus)。ウルカーヌスはギリシャの火と鍛冶の神。かれはユピテルとヘラの子、あるいは、ヘラが男なしに生んだ子とされている。天上でかれは自分の宮殿に仕事場をもち、オリュンポスの神々の宮殿はすべてかれの造ったもので、ユピテルの雷霆もかれがこしらえてユピテルに供したとされている。

24.3 ルーン人の勇猛な国民 — a forte gente de Lusó。ルンタニア人。ルーンについては cf. 39 注。

25.3 装備よろしき勇猛なモーロ — o Mouró forte e guarnecido。ポルトガルは、アウグストゥス以来 (B.C. 27) ローマの属州となりローマ化された。民族移動期にはスエヴィ、アラン族が侵入し、さらに 477 年西ゴート族が侵入し、西ゴート貴族によるローマ化、キリスト教化がすすんだ。711 年モーロ人が侵入しその支配は全土に及んだが、イベリア半島北部に西ゴート貴族は残存した。キリスト教徒による国土回復運動はスペインより進行が早く、Ⅹ世紀末にはコインブラを中心とした地域がレオン＝カスティリヤ王によってブルゴーニュ伯に与えられ、その子アフォンソ・エンリケシュは、1139 年オーリケの合戦でモーロ人を破り、1143 年ポルトガル王国を建てた。その後、1249 年最南部アルガルヴェの回復にいたるまでの 1 世紀間のポルトガルの歴史は、モーロ人とのたえまない闘争の歴史であった。

25.5 カスティリヤ人 — o Castelhanó。歴史を通じてポルトガルは、隣の大國カスティリヤの圧迫に悩まされ、つねに同国の食指の的となり、王位をめぐる両国の間に葛藤が絶えなかったが、実際には、決して Camões が言うように幸運にばかり恵まれていたわけではなかった。中世の主なポルトガル＝カスティリヤ関係をみると、アフォンソ・エンリケシュとアフォンソⅦとの Valdevez の役 (1137) と Samora の講和 (1143)、この講和によりレオンから独立。アルガルヴェの領土権をめぐる紛争があったが、ポルトガルに帰属することになった (1267)。カスティリヤ軍との Guadalquivir 河口での役 (1381) と Badajoz の講和 (1381)。ドン・フェルナンドの死後、カスティリヤ王に嫁したドナ・ベアトリシュの王位継承をめぐる起きた Aljubarrota の役 (1385)。1492 年、フェルナンドとイザベルが結婚し、Granada よりモーロ人を追い払い完全に国土を回復すると、カスティリヤはヨーロッパにその勢力を伸ばしはじめ、ⅩⅦ世紀にはカルロスⅠ (神聖ローマ皇帝カールⅤ) をいただき、国力の絶頂に達し、1580 年ポルトガルを併合した。

26.2 ヴィリアート — Viriato (Viriatius)。ローマ人は前Ⅲ世紀末にイベリア半島に達し、ルンタニアに侵入しようとした。ルンタニア人はこの危機を前にして、牧人であり獵師であったヴィリアートのもとにローマ人と戦った (B.C. 149—139。) が、部下の裏切りによってかれが死ぬと、その抵抗は弱まり、以後ローマ人の侵入を受け入れること

になった。

26.4 ロムルスの子孫 — a gente de Rómulo。ローマ人を指す。ロムルスはローマ市創建にかんする伝説の主人公であるが、歴史的には根拠がない。

26.6 異邦人 — peregrino。セルトリオ (Sertório, lat. Sertorius) (B.C. ?-72) を指す。ローマの軍人、政治家。マリウス (Marius) とシラ (Sylla) の時代にマリウス派についてシラと対立した。マリウスの死後、シラの手を逃れて北アフリカに滞在していた。前80年、コタのローマ艦隊の目をくらましてジブラルタルを渡り、イスパニアに上陸した。さわやかな弁舌でルシタニア人を魅了し、反ローマの徒を組織し、ローマ執政官を倒した。ヒスパニア・キテリオル (Hispania Citerior) の大半はかれの手中に帰した。政治的手腕に恵まれ、議会をつくり、学校を建て、税金をできるだけ軽減するなど善政に意を用いた。かれの理想は、住民をローマ風に教化し、住民の承認と協力のもとで安定した政府を樹立することで、この目的のため努力を惜しまなかった。前77年ローマはポンペイウス (Pompeius) を送ってかれと敵対せしめたが、セルトリウスはポンペイウスの軍隊をサグントで潰走せしめた。前72年宴席で暗殺された。かれはつねに牝鹿を伴っており、女神ディアナの化身といわれるこの牝鹿からかれが靈感を得ているものと住民は信じていた。

27.5 日の長い処もみじかい処も — Onde o dia é comprido e onde breve。赤道をはさんで北半球と南半球とでは昼夜の長さが逆になるから、ここでは、「北半球から赤道を越えて南半球までも航海して来た」の意。

28.7 新大陸 — a nova terra。インドを指す。ポルトガル人は、XIV世紀初頭すでにカナリア諸島 (Arq. de Canárias) を発見していたが、組織的にアフリカ西岸探検事業に乗り出したのは、エンリケ航海親王からである。1418年マデイラ諸島 (Arq. de Madeira) の探検、1427-31年アソレス諸島 (Arq. de Açores) の発見を経て、1433年、10年間の努力の結果、越えずの岬ボジャドル岬 (Cabo de Bojador) の迂回に成功し、以後の探検は急速に進んだ。エンリケの死後もジョアンIIの手で熱心に探検は続けられ、もうこのころになるとはっきりとインドへの航路発見が目標になり出した。1482-84年にはコンゴ河口に達し、1487年からは陸路エチオピア～インドの探検が企てられ、王命によってコヴィリアン (Pêro de Covilhão) (XV-XVI世紀) は、アデンからインド半島西岸にいたり、さらにペルシャ湾頭Ormuzから紅海、アフリカ東岸を調査した。一方海路探検の命を受けたディアシュ (Bartolomeu Dias) (?-1500) は、1487-1488年の航海についてアフリカ大陸の南端喜望峰をまわり、インド洋への入口に達した。かくて、ディアシュの発見とコヴィリアンの調査をつなぎ合わせて、インド航路を発見するために、マヌエルI (D. Manuel I, 1469-1521, 在位1495-1521) の命令によって、ヴァスコ・ダ・ガマは1497年テージョ河口を出発したのであった。

小林 英夫 早稲田大学教授
池上 岑夫 東京外国語大学助教授
松尾多希子 東京外国語大学助手